

P2-033

島根県内保育所における看護師設置状況と医療的ケアの課題と展望

前林 英貴、藤原 映久

島根県立大学人間文化学部 保育教育学科

【問題と目的】

保育所への入所を希望している障がい児や医療的ケア児が増加する中、保育所として合理的配慮を持って入所を検討し、環境整備を考慮していかなければならない。そのため、保育所に看護師や保健師資格を有する者の配置が必要になるだけでなく、非医療職者に対しても今後一定の研修実施が求められていく。本研究では、保育所における看護師設置状況、障がい児・医療的ケア児の受け入れ状況を調査し、保育所で働く保育士の医療的ケアに対する意識や課題、現状を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】

島根県健康福祉部の協力を得て、島根県内の認可保育所と認定こども園302園に対して、アンケート用紙による実態調査を行った。また、IBM SPSS Statistics Ver.24を用いて単純集計を行い、質問項目の関連について分析した。本研究は、研究者所属大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

アンケートの回収は、108施設（回収率35.8%）であった。施設に看護師等の医療職者が在籍している施設は46.3%（採用予定を含むと50.0%）、うち常勤での在籍は62.0%と高い割合であった。気になる子どもが在籍している施設は88.9%、障がい児を受け入れている施設は51.9%（過去の受け入れを含むと89.8%）、医療的ケア児を受け入れている施設は5.6%（過去の受け入れを含むと12.1%）であった。また、「医療的ケア児の受け入れが増加すると思うか」という質問に対して、41.6%の施設がそう思うと回答したが、74%の施設が医療的ケア児の受け入れは困難であると感じていた。医療的ケア児の受け入れには、医療職者の配置、設備や備品等の整備、職員への研修が必要であると回答し、保育士が医療的ケアを担うことに関しては「責任が重い」など、否定的な意見が多くみられた。

【考察】

島根県内認可保育所における看護師設置率は、平成21年度の全国調査29.7%と比較すると高い割合であったが、保育所の法人種別において看護師設置の有無に差がみられた。また医療的ケア児の受け入れには消極的な意見が多かった。今後、医療的ケア児を地域の保育所が受け入れていくには、医療職者の配置とその専門性を生かすことのできる施設内強化、保育士に対する医療的ケア講習の実施など、働く保育士の身体的・精神的負担を軽減するための体制作りが必要と考える。

P2-034

幼児を対象としたクロノタイプからみた生活改善の評価

岸本 三香子¹、竹内 恵子²、村上 亜由美²

¹ 武庫川女子大学生生活環境学部 食物栄養学科

² 福井大学教育学部

【目的】

幼児の生活リズムの夜型化が問題となっており、疲労度の増大や集中力の低下など心身の健康に悪影響を及ぼすとされている。また、幼児の生活リズムの形成には保護者の養育態度が関連していることが報告されている。本研究では、幼児の生活習慣の改善とクロノタイプの前進の双方が健康度に及ぼす影響について検討した。

【方法】

私立幼稚園児12名（5歳児）とその保護者を対象とした。保護者には幼児の生活習慣アンケート、生活活動記録、食事調査を依頼し、幼児は体温及び唾液コルチゾールの測定、睡眠及び活動量の測定を行った。体温は1日7回測定し、唾液は起床時、登園時、降園時、就寝時の4回採取し測定に用いた。食事調査は、3日間の食事内容を保護者に記録を依頼した。保護者に生活習慣、食事内容を個別に返却するとともに、先行研究から得られた朝型の特徴を示すようになる生活活動や食事について助言し、約3週間かけて健康度の上昇を期待した生活リズム改善の介入を行った。調査は平成29年9月（介入前）と11月（介入後）の連続する各3日間とした。

【結果】

幼児のクロノタイプの（介入前、介入後）割合は、朝型（38.4, 33.3）、中間型（58.3, 58.3）、夜型（0.0, 8.3）であり、介入した3週間ではクロノタイプを前進させることはできなかった。平日の起床時刻（6:59, 7:23）・就寝時刻（21:08, 21:01）には差がみられなかったが、休日の就寝時刻が早まり（21:28, 21:07）、平日と休日の起床・就寝時刻の差（54分、15分・20分、6分）は少なくなり、規則性がみられるようになった。また、平日の戸外活動時間が増えた（42分、117分）。健康度は上昇傾向（27.8点、29.4点）を示し、8名の幼児の健康度が上昇した。健康度の上昇群と非上昇群に分けて健康度に影響を及ぼす要因を検討したところ、上昇群では食事要因（食品群別摂取量、エネルギー産生栄養素バランス）で有意な変化が認められた。また、唾液コルチゾールは、測定点のいずれにおいても上昇群で非上昇群より低値傾向を示した。一方、クロノタイプが夜型に後退した幼児は、健康度が低下しており介入による生活改善項目は少なかった。

【考察】

食習慣の改善や、生活リズムにおける保護者の介入状況の良好さや介入姿勢が、幼児の健康度に影響すると推察された。今後さらに対象人数を増やし検討していく。